

2. 大学におけるモデルプログラムの実施課題

本年度の実施状況および受講者アンケート調査の結果等から、本モデルプログラムの改善および全国へ展開するための課題は次のように考えられる。

<p>課題1 勉強会ゼミについて</p>	<p>①時間の制約（90分×4回＋発表会）のもとでの実施について</p> <ul style="list-style-type: none">● 勉強会ゼミについては「短い」「やや短い」の回答が約70%と、時間不足であったことや、「ゼミの内容はとても難しくついていくのがやっとだった」という受講者の声もあり、アンケートの難易度調査で60%以上が難しいと感じていた。● 勉強会ゼミを包含している今回の研修の全6回という設定は、平成28年度に策定されたモデルプログラム全10回を試行実施するにあたり、通常業務と両立して参加しやすい研修回数を考慮した結果であった。● 本年度大学で実施したプログラムは、ビジネススクールの専門性を活かし、非常に学びが多いものであったため、企画評価委員会でも一定の評価が得られた。しかし一方で、難しいと感じた受講者が多かったことを考えると、その学びを修得するには全6回の研修では時間不足であったことも事実である。● モデルプログラムとしての汎用性を維持するためには、全6回程度で実施することが望ましいことを考慮すると、この回数を踏まえた適切な学びの質と量に調整する必要があるだろう。 その意味においては、今回の実施では教育内容を盛り込み過ぎていた。勉強会ゼミの実施課題の多くもここに起因している。● 研修初回に今年度のプログラムに取り組むためにどのくらいの時間を投じる必要があるかを明示したところ、事前学習や準備等の研修時間外の作業量に戸惑ったという声があったことから、研修初回を迎えるまでの間に、課題の内容、必要準備時間などについて文面等でガイダンスし、仕事とのスケジュール調整などの準備を促しておく方法も考えられる。 <p>②成果物について</p> <ul style="list-style-type: none">● 本年度はビジネススクールの専門性を活かし、成果物をケース及びノートと設定し、これらの作成を通じた経営視点の修得を目指したが、ケース及びノートという不慣れな
--------------------------	--

	<p>成果物の最終イメージと作成プロセスを見通すのに時間を要した、という声も見受けられた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 「時間を要する」ということには、全6回という研修回数を維持しつつも、各研修間のインターバルを大きくすることで、ケース及びノートへの理解の進行に必要な時間を確保する方法も考えられる。 ● あるいは、ケース及びノートに求める到達水準が上がり過ぎないように留意したゼミ運営を考え、全6回の研修時間内で取り組むことが可能なケースやノートのあり方を開発していくことも一案であろう。
<p>課題2： 受講者へのフォローについて</p>	<p>①フォロー体制について</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 課題1で述べたように、本研修では終始、受講者にとって難易度の高い内容を扱ったので、6回の研修以外の時間に受講者をフォローする必要度が結果的に高くなった。そのことは「家に帰ってからは悩むことばかりで」という受講者の声にも表れている。 ● 受講者全体への大括りなフォローアップはプログラムディレクターが適宜行った。しかし、ケース及びノートの作成にあたっては、個々の受講者が多様に抱える悩みへの対応が必要になるため、今回の実施では、この悩みをパートナー制の受講者間レビューによってカバーしようとした。この受講者間レビュー構造は全体的には奏功していることが受講者の声からも伺えるが、個別には「ペアが仕事で忙しく、タイムリーに助言がもらえない」という状況もあったようだ。 ● 勉強会ゼミの満足度について、3つのゼミの内、ゼミAとCの満足度が「よかった」が100%であるに対し、ゼミBは「よかった」が50%、「どちらかといえばよかった」が40%、「どちらともいえない」が10%と、違いがあった。この違いは、ペアとの受講者間レビューの充実度と、担当教員による研修時間外の指導量の差からくるものであると考えられる。今回の研修では、勉強会ゼミにおける4回の教室における研修時の指導や、研修時以外の受講者へのフォローは、各ゼミ担当教員が教員の判断により適宜行ったが、その指導方法や指導量が教員によって差がつき、受講者満足度の違いに繋がったと考える。受講生の主体性の尊重と教員によるフォローのバランス、そしてプログラムディレクターと各教員の連携を適宜見直し、受講者への最適なフォロー体制の構築が必要であると考えられる。

	<p>②コミュニケーションツールについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 今年度もGoogle Classroomで事務連絡や課題の提出を行ったが、研修開始前に使い方に対する質問や企業のセキュリティレベルにより使用できないという声があった。また、アンケートでも「少し使いづらい」「研修時以外のコミュニケーションを図るツールとしては改善が必要」という声があった。
<p>課題3： ネットワークの構築について</p>	<p>①受講者間のネットワークについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 勉強会ゼミ内ではディスカッション及び受講者間レビューによって必然的に交流が図れるプログラムとなっており、アンケートからもゼミ内でのネットワークはとても強いものになっていることがわかる。一方で、もっと前半から交流する機会を積極的に持てればよかった、ゼミが異なる人との交流も深めたかったとの声もあり、参加者全体でのネットワークの構築スピードを高めていくための工夫が不足していた。 ● 交流時間は初回と最終回に設けたものの、着席形式のため交流する人数が限られたとの声もあり、立食形式にするなど交流をさらに深めるための工夫もできたはずである。
<p>課題4：効果測定</p>	<p>①アンケートの項目について</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 本年度、大学で実施したプログラムは、非常に学びが多く視座の高い内容であったことから、満足度は高く、アンケートの記述回答も前向きな意見が多かった。一方で、本事業の目的であるモデルプログラムの効果検証にあたって有効なデータや声が不足していた。事業の大目的は「モデルプログラムの試行実施と効果の調査」であるが、実施大学の強みを活かそうとする実施にいくらか傾倒した感もあり、この部分の反省も必要である。 ● 効果測定の軸がアンケートで収集した「満足度」「難易度」に終始し、本事業で学んだ内容をどのように業務に活かし、さらには所属組織の成長にどのようにつなげていくかの考察まで至らなかった。 ● 特に、今年度は企業からの推薦者も4割いたこともあり、本事業へ推薦いただいた企業側へのメリットも十分に視野に入れての効果測定も重要だと考える。例えば、受講者の成果物を組織内で評価し、本人あるいは大学にフィードバックしてもらう仕組みを付加することも考えられる。